

図書室月報

2020年(令和2年)7月5日

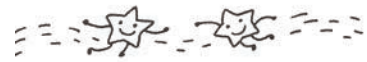
第686号



いとうせいこう著

『想像ラジオ』

片岡 優



子供の頃から、ラジオが好きだった。

ナイターをつければ、アナウンサーの声からスタジオの風、匂い、そして息づかいを感じて夢が膨らんだ。トーク番組にダイヤルを合わせれば、親戚の家に上がり込み、楽しいお喋りの輪の中にあるような気分になった。

いずれにしても、卓越したラジオ放送者というのは、聴く者の想像力を刺激し、視覚よりも多くの情報を届けるものだ。テレビが視覚のメディアならば、ラジオはいわば聴覚と「想像」のメディアである。

本書が描く番組「想像ラジオ」は、あの東日本大震災が起きた日の夜に始まった。声を聴くには、アンテナもスピーカーも必要ない。想像し、心の耳を傾けるだけで良い。ある意味、ラジオの究極形といえる。

(想像の)声の主は、自称「たとえ上手のおしゃべり屋」DJアーク。その肩書が示す通り、彼は陽気に喋りまくり、懐かしのナンバーを次々かけていく。しかしどうやら、彼の肉体は震災に傷つき、高い木の上で身動きが取れないようだ。それどころかもはや声を出すこともできない彼は、想像の電波を発することで、多くの犠牲者と共鳴し、それを「聴こうとする」人々に思いを届けようとする。

こうしてあらすじを書くと、ある種の現実主義的な方には、単なるオカルトとして一蹴されてしまうかもしれない。

しかし誰しも、「あの人が今いたら、何と云うだろうか」と想像したことがあるはずだ。

戦後の名ラジオ放送者・永六輔はこう言った。

「人は死んだときに死じやない。その人の話を誰もしなくなつたときが、その人が死んだということだと思ふの。死者を覚えている人がいる限り、その人の心の中で生き続けている。

だからぼく、親父もおふくろも女房も生きてます、会つてます(隈元信一 2017 『永六輔 時代を旅した言葉の職人』平凡社)

私には、若くしてこの世を去った従兄たちがいる。辛い時、苦しい時は、「彼らの分まで生き抜こう」と思うと、どこからか励ます声が聴こえ、乗り越える力が湧いてきた。

こうして想像する時、死者は過去の存在ではなくなり、共に現在を生き、未来に進むためのよすがとなる。「想像ラジオ」は、そうした営みの表象なのである。

また想像は、自らの痛みを他者への共感に変える力も持つ。ひとは、痛みを知ることによって初めて他者のそれを想像し、共感することができるからだ。

ただ、あの震災のように「想像を絶する」痛みを伴う事態では、テレビの前で立ちつくすしかなかった「部外者」が、逃げ惑い、全てを喪った「当事者」の痛みを想像できるのか、という問題が生じる。

しかしもとより、他者と全く同じ体験をすることはできない以上、我々は想像することしかできないのである。

当事者へのデリカシーが必須であることは勿論だが、「同感」できないからと言って、想像し、共感し、ギャップを埋める努力を放棄してしまえば、この世の中は、忘れてはいけないことを、命を忘れてしまうだろう。現に、かつての戦争についてはそうなりつつある。果たして、震災や原発事故も同様にして良いのだろうか。

今、震災から十年目を迎えて確実に風化が進む一方で、未知の病禍へと形を変えながら、あの時と同じく無辜の命が奪われ続けている。毎日ニュースで読み上げられる数字では、命を表すことはできない。一つ一つの命に、一つ一つの物語がある。本書は、そうした物語と向き合いながら生きるために、改めて手に取られるべきである。(河出書房新社)

地域資料

くにたち地域資料のご案内

公民館では、国立市に関する資料・情報を収集して、閲覧できるようにしています。
図書のほか、パンフレットやリーフレットなど、多様な形態の資料があります。



2階 ガラス戸棚の地域資料

◆国立市民が書いた本

【2階】

国立市民が書いた本のコーナーがあります。小説や詩集、写真集、国立の自然に関する観察記録など、その形態は様々です。国立を愛し、終生棲家とした作家・山口瞳の作品も数多く取り揃えています。山口瞳の『わが町』、『居酒屋兆治』では住んでいた国立の人々の人情を描いています。



2階 山口瞳コーナー



2階 国立市民の本コーナー

◆国立市に関する資料

【2階ガラス戸棚・中2階】

国立市に関する資料を閲覧できるコーナーです。国立大学町誕生の頃の写真や大学町工事予定表などを掲載した資料集、国立市農村部―旧谷保村―の古老にかつての谷保の暮らしを聞き書きした『国立の生活誌』など、国立市にまつわる資料をご覧頂くことができます。

◆くにたち市民グループの発行物・ミニコミ収集

【中2階】

市内で活動するグループや団体が発行しているチラシ、冊子等を収集し、グループごとにファイリングをして閲覧できるようにしています。市民活動の様子やこれまでのあゆみをうかがうことができます。また、発行された当時の暮らしなども垣間見ることができません。



新着図書から

〈歴史〉

- 草の根歴史学の未来をどう作るか 黒田智編(文学通信) 210
敗者たちの中世争乱 関幸彦著(吉川弘文館) 210
天変地異はどう語られてきたか 串田久治編著(東方書店) 220
日本史を変えた八人の将軍 本郷和人著(祥伝社) 281
あれもこれも地理学 富田啓介著(ベレ出版) 290

〈社会科学〉

- 英語対訳でわかるニッポンと日本人の不思議 牧野高吉著(辰巳出版) 302
格差と分断のアメリカ 西山隆行著(東京堂出版) 302
社会運動の現在 長谷川公一編(有斐閣) 309
ポピュリズムという挑戦 水島治郎編(岩波書店) 311
柳田國男民主主義論集 柳田國男著(平凡社) 311
戦争とは何か 多湖淳著(中央公論新社) 319
わたしの戦後史 95歳、大正生れ、草の根の女のオーラルヒストリー戦争の「痛み」を知る世代が求め続けたもの 谷たみ語り(梨の木舎) 319
松岡洋右と日米開戦 服部聡著(吉川弘文館) 319
アメリカの制裁外交 杉田弘毅著(岩波書店) 329
AI vs. 民主主義 NHK取材班著(NHK出版) 361
育てられない母親たち 石井光太著(祥伝社) 367
逃避型ネット依存の社会心理 大野志郎著(勁草書房) 367
近藤勝重流老いの抜け道 近藤勝重著(幻冬舎) 367
ボーイズ レイチェル・ギーザ著(DU BOOKS) 367
災害ケースマネジメント◎ガイドブック 津久井進著(合同出版) 369
その後のボランティア元年 宮垣元著(晃洋書房) 369
一九三〇年代「教労運動」とその歌人たち 碓田のぼる著(本の泉社) 372
図説デザートの歴史 ジェリ・クインジオ著(原書房) 383

地域資料の本棚より
一部紹介します。



山口瞳著

『還暦老人ボケ日記』

男性自身シリーズ』



冒頭で昭和61年に60歳の誕生日に絶筆を宣言したが、連載している週刊誌のコラムの仕事は残し、これを「還暦老人日記」と称して日記体で続けることにしたとあります。友人達との付き合いや、馴染みのお店、国立高校の夏の高校野球の話など、日々の暮らしが書かれています。このコラムは昭和38年から亡くなるまでの31年間、一度も休まずに連載が続きました。

更谷いづみ著

『帽子作家 関民 Taiis's Spirit』

―ユニゾが動き出すハント―』



国立市内にアトリエを構えた帽子作家関民さんの弟子である著者が、民さんの人柄や人生観に魅せられて、そのココロの贅沢な生き方を綴っています。お客様と沢山お話しをしてその方の普段の生活や、帽子を被る状況を把握してデザインする

といったプロとしての誇りや、街を居心地良く元気にしてくれる国立市にあるお店への感謝など、大正・昭和・平成を生きたひとりの女性の生き方がつづられています。



国立文庫編集室 企画・編集

『国立文庫』

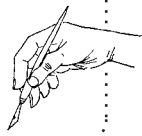
―国立ストーリーシリーズ解説目録―』

国立というまちを文庫として捉え、国立の四十七の場所にまつわるの物語のタイトルとあらすじが文庫目録として記してあります。通常の文庫目録と異なる点は、紹介された物語が文庫として実在するわけではなく、本文に相当する部分は実際にまちなかで生活を営んでいる人々の心に刻まれていることです。物語が在る場所は、各あらずじのとなりの地図上に示してあり実際に訪れることができます。

菅野則子著

『江戸の村医者』

―本田寛庵・定年父の日記のみ―』



谷保村の大地主、本田家。江戸時代後期から明治初年にかけて、地主として、また村医者として活躍した父・寛庵、民権運動に身を投じた息子・定年の日記を中心に、彼らの生涯と時代の様相を丹念に読み解いた本です。

かつての国立の、「明治維新」の時代に生きた父子の息づかいを感じるができます。

〈自然科学〉

数の世界 松岡学著(講談社)

進化のからくり 千葉聡著(講談社)

100語でわかる遺伝学

ドミニク・ストッパリヨネ著(白水社)

サピエンス日本上陸 海部陽介著(講談社)

サンゴの白化 中村崇共編著(成山堂書店)

大衆文化のなかの虫たち 保科英人著(論創社)

江戸の鳥類図譜 細川博昭著(秀和システム)

〈工業〉 懐かしいお菓子 伴田良輔著(新潮社)

みその教科書 岩木みさき著(エクスマレッジ)

海を渡った故郷の味 難民支援協会編著(トゥーヴァージンズ)

旬の食材時候集 佐藤信著(ブイツーソリューション)

〈産業〉 養蚕と蚕神 沢辺満智子著(慶應義塾大学出版会)

客室乗務員の誕生 山口誠著(岩波書店)

〈芸術〉 音楽家の食卓 野田浩資著(誠文堂新光社)

国策落語はこうして作られ消えた 柏木新著(本の泉社)

〈言語〉 日本人のための漢字入門 阿辻哲次著(講談社)

漢字の植物苑 田満宇二郎著(岩波書店)

〈文学〉 残夢童女 石牟礼道子資料保存会編(平凡社)

黄犬交遊抄 ドナルド・キーン著(岩波書店)

海の底から 金石範著(岩波書店)

綴る女 林真理子(中央公論新社)

となりのヨンヒさん チョンソヨン著(集英社)

ポリー氏の人生 H.G. ウェルズ著(白水社)

910
91キ
91キ
91キ
91ハ

インターネットで読める
おすすめ作品

ヘミングウェイ著

『老人と海』より一節

「うまくいくように、お爺さん
「お前もな」老人はそれに応えて
いった。かれはオールけいぎの繫索けいぎを小
舟の櫂かいにあてがい、それから、
さっと前かがみになると、オール
に受ける水圧をはじかえすよう
にして、暗がりのなかを港から大
海めざして漕ぎだしていった。ほ
かの浜からも何隻かの小舟が海に
向って乗りだしていく。月はもう
すっかり山のかなたに沈んでしま
ったので、舟の形を見ることはで
きないが、オールを捌く水音が老
人の耳にはつきりとときこえてくる。

図書室で本を手取るのが難し
い方には、この作品はインターネット
上の図書館「青空文庫」でも楽しむ
ことができます。

青空文庫ホームページ

<https://www.aozora.gr.jp/>



〈私の本棚から 第4回〉

ドストエフスキー著 江川卓訳

『地下室の手記』



大久保 芽衣

何度読んでも「わからない」のだ。何かが始まる訳でもないし、
一本のストーリーがあるわけでもない。それに主人公は一步だつ
て地下室から出ていない。延々と、そう延々と地下室で捏ねくり
回した自意識を、強烈な呪詛のように吐き出し続けるのである。
主人公の周りにはいつだって自身を責め立てる架空の「君たち」
がいる。必要もないのに彼らを必死に論破し、荒ぶり矛盾し捲し
立てまくる、この小説の中では一から十までそれだ。加えて主人
公自身、決して尊敬できるような人間では無い。要らぬ葛藤を抱
え、理解し難い行動を取る。自意識過剰で被害妄想をし、あらゆ
るものを見下しては、心の中で傲慢にも罵りまくる癖に足は一步
だつて動かせないような、そんな男なのだ。周りにいても私は友
達にはなりたく無い。主人公自身、自らがどうしようも無い人間
であることは何回も言及している。だが、そんな自分を心の底か
ら嫌悪しているようには見えない。むしろ誇っているようにすら
感ぜられるのだ。それは安っぽく単純なユートピアに幸福を求め
るよりも、高められた苦悩によって人間として生きることを選ん
だという誇りなのかもしれない。そう、彼は誰よりも人間なのだ！
狂いなく動くレコード盤の針なんかじゃやない、どこまでも不合理
で矛盾に溢れた人間なのである。その感覚はきつと、自分たちが
作った法則にすら支配されるようになってしまった私たちが、法
則の奴隷になっていることにすら気付かぬ私たちが、今すぐ拾わ
なければならぬ何かなのだ。私には彼が恐ろしく卑屈を拗らせ
た人間にも、鋭く力強い革命家にも見える。きつとどちららもほん

くにたちブッククラブ

—空間を超えて世界と向きあう文学—

東山彰良『流』(講談社文庫)



講師 榎本正樹 (現代日本文学)
とき 7月9日(木) 夜7時半~9時半
ところ 公民館 地下ホール
定員 30名 (今年度すでに申込済の方は申込不要)
申込先 公民館 ☎(572)5141

*この講座は、あらかじめ
作品を読んできて、参加者
が「読み」を出しあいます。
講師のお話しも聞きます。

*次回9月10日(木)は、井上靖『敦煌』(新潮文庫)です。

〈参加される方へ〉

- ・間隔を空けるためホールで実施します。
 - ・マスクの着用をお願いします。
 - ・発熱 37.5℃以上、咳、咽頭痛等の症状がある方はご遠慮ください。
 - ・石けん等による手洗いや消毒液による手指の消毒をお願いします。
 - ・過去2週間以内に感染拡大の地域や国への訪問歴がある方はご遠慮ください。
- *皆様の安全のため、ご協力いただきますようお願いいたします。

とうなのだ!
なんなのだこの小説は!嵐のように過ぎて行ってしまう!確かに彼を積み上げて行っているはずなのに、あつという間に霧散してしまう!なんと歯痒いことか!私にはこの小説を掻い摘んで説明することなんて出来やしないし、その必要すら無い。ただ、ただ、この怒りと苦悩に触れて欲しい。さすれば出会えるだろう。矛盾と自意識に塗れた「人間」というものに。
(新潮社)